

軍隊生活

一九五六年十月、林敏生の軍隊生活が始まった。

これに先立ち彼は、八月に司法試験、九月に公務員任官試験を受験していたが、結果はまだ発表されていなかった。入隊のため台中車隆埔に向かう汽車の中、将来への期待に一喜一憂、彼の心もコトコト揺れた。

三ヶ月の厳しい体力訓練に身も心も疲れ果てた彼に十一月、合格発表がもたらされた。公務員任官試験には上位合格したものの、期待していた司法試験には落第。失望のあまりキャンプの芝生に寝転んで、ブーツと雲をながめていた彼は、「両親にすまない」と何度も自分を責めた。

どのくらい経つただろうか。芝生から起き上がるころには、いつもの敏生に戻っていた。憂鬱は彼の性に合わない。「チャンスはいくらでもあるじゃないか」。

訓練が終わると彼は、当時まだ準備中だった軍法学校に配属された。階級は二等兵から下士官へ。四ヶ月間の分科教育が始まった。軍法学校の校長は呉智海軍少将。

敏生はここで軍事刑法、軍事裁判法など軍隊の規律に関する法学課程を学んだ。体力訓練から智力訓練に。敏生にはやはりこの方が楽だった。

一九五七年五月、分科教育を終え敏生は、晴れて少尉に任官。台大法科のクラスメート黄金富とともに第八十一常備師団の予備第五局に検察官として配属された。予備役の訓練が主眼の予備師団だから、訓練期間以外には兵隊もいない。取り扱う事件といえは、脱走兵や殺人、強姦など。それさえ時

折の楽な仕事だった。

同僚の黄金富は大学四年で司法試験に合格。服役中は、事件処理などの仕事を多めに引き受けてくれたりなど、敏生の受験を気づかせてくれた。後日、黄金富の妹と敏生の兄が結婚。二人は婚姻関係を結ぶことになる。

当時の師団長は傅伊仁少将。面白い人物で、あるとき偶然の機会から敏生と意気投合。用事にかこつけては敏生を呼び出して世間話に興じた。「この軍法屋は頭が切れる」と、敏生をいたく可愛がった。師団長閣下と軍法屋は大の仲良し。キャンプで知らぬ者はなかった。人を疑わないおっとりした人なつこい性格に加えて、政治的なこだわりを持たない気安さで、敏生は誰からも好かれた。

軍人の俸給はわずか。故郷を離れ、国民党とともに大陸からやってきた軍人の中には、もめごとを起こす者が多かった。敏生には少尉として百六十元、それに司法官手当二百四十元を加えた四百元が毎月支給されていたが、少佐クラスの士官でも月給は三百元程度だったから、農家の台湾人妻を貰っていた兵士などは、ちよくちよく家の手伝いに帰った。老兵が重たい米袋を担ぐ姿に、敏生は憐憫の情を覚える。しかし中には、台湾の生活に適応できず、家族との音信も跡絶え、自棄になっていた者もいる。彼らはいつも情緒不安定で、何をしでかすか分からない。事実あの頃、カービン銃で同僚を乱射し、最後に自殺して果てるという事件が多発した。訳も分からず死出の道連れにされては堪らない。敏生と同僚たちは、なるべく彼らを刺激しないよう、心がけた。

六月。弁護士試験にラストスパート。短い時間で効果的な勉強を。敏生持ち前の合理主義がここでも発揮された。彼はまず受験に必要な書籍を机に並べ、読むべきか読まざるべきか、その利害得失を逐一吟味するのである。民法は真先に淘汰された。分量の多いことが一つ、基礎が出来ているという

のが一つ。悪くしても点数のロスは一〇点代で抑えられる。次に、歴史と地理が放棄された。悠久にして広大な中国を短期間で理解しようというのが土台むりな話。国文学は作文一題。準備のしようがなく、これも淘汰。商法は会社法、手形・小切手法、海商法と保険法の四種。点数の配分が少ない上、内容も雑多のため、半ば放棄。このように消去法で一つ一つ削っていき、最後に残った刑法、憲法、破産法、強制執行法、民事訴訟法および刑事訴訟法に、敏生は全身全霊を傾けた。

試験が一週間前に迫った八月のある日、敏生は休暇を申し出た。「また林敏生か」と皮肉られたが、同僚の暖かい励ましを感じつつ、敏生はキャンプを後にする。

軍人割引の切符では鈍行しか使えない。嘉義經由台北行きの列車に十数時間。車中、蔡章麟著『民事訴訟法』を一気に読み終えた敏生は、ふと、合格を確信する。いずれにせよ二ヶ月の猛勉強は、精力の限界だった。

試験は四日間。数百人が受験した。試験前にムダ話や出題予想をしない彼は、開始のベルが鳴るまで暗記に励む。憲法の試験では、直前に暗記していた第八条が出題され、すわとばかり、一気に書き上げた。運は悪くない。問題の意味さえわからずまごつくのではないかと心配していた国文学も、今回は口語文に近いものが出た。地理と歴史は、試験の前日、師範大学付属高校に在学中の弟紀彦から借りて読んだ教科書が役に立った。「中国の地形と気候の特色を論じよ」。一夜漬けで暗記したままを、筆に任せて書き綴った。

合格ライン五十五点のところを、五十八点で辛くも合格。敏生は競争率十倍以上の難関を突破し、晴れて事業の第一歩を踏み出したのである。

その後の五ヶ月は将来のための準備期間。中国語は強化種目の第一。国語日報出版の『古今文選』

をメニューとして徹底学習が始まったが、例の凝り性がまた出て、古典文学の魅力に取りつかれる。唐詩、宋詞の優美な世界に恍惚とする毎日であった。

一九五八年三月三十一日。十八ヶ月の軍隊生活が終わった。身体を鍛え、知識を膨らませてくれたキャンプでの生活。敏生は一時たりと無駄に過ごしたことはなかった。

兵役終了者は鈍行なら無料で帰宅できるが、鈍行で帰る人はまずいない。「帰心矢の如し」。敏生も快速列車で一路台北へ。車中はどれも見慣れた顔。充実した気分で敏生は、一人一人と挨拶を交した。